



統語的複合動詞 V + 疲れる について

木戸, 康人

(Citation)

神戸言語学論叢, 11:14-30

(Issue Date)

2018-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010268>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010268>



統語的複合動詞 V + 疲れる について

木戸 康人

神戸大学・コネチカット大学・日本学術振興会特別研究員

1. はじめに

日本語には 2 つ (以上) の動詞を連続させた複合動詞がある。複合動詞は英語やフランス語などの言語ではほとんど観察されないのに対して、日本語や韓国語、中国語などの言語では生産的に観察されることが知られている (Masica 1976)。特に、その中でも日本語では極めて多くの複合動詞が観察されることが影山 (2014) によって報告されている。さらに、モジュール形態論を提唱している影山 (1993) によると、日本語複合動詞は語彙部門で作られる語彙的複合動詞と統語部門で作られる統語的複合動詞に大別される。語彙的複合動詞は、「後項動詞 (V2) が直接、前項動詞 (V1) の連用形に結合する。すなわち、二つの語彙範疇が直接的に複合である [ママ] という点で『語彙的』である」。一方、統語的複合動詞は、「V2 は、直接、V1 の連用形に付くのではなく、V1 を主要部とする補文 (幾つかのレベルの動詞句) を取る。すなわち、統語的な句に付くという点で『統語的』である」(影山 2013)。

本稿の目的は、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の分類を再考することである。特に、V2 が「-疲れる」の複合動詞を主に取り上げる。V2 が「-疲れる」の複合動詞は Matsumoto (1996) が語彙的複合動詞に分類されるものであると見なして以来、語彙的複合動詞に分類されている。しかしながら、本稿では、V2 が「-疲れる」の複合動詞が統語的複合動詞と見なされるものしか合格しない統語テストに合格することを示すことにより、V2 が「-疲れる」の複合動詞は統語的複合動詞であると提案する。この提案を裏付けるために、本稿では筆者の内省による作例と検索エンジン Google から抽出したデータを提示する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第 2 節では、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いについて概説する。第 3 節では、vP に適用される統語テストを V2 が「-疲れる」である複合動詞に当てはめる。そして、V2 が「-疲れる」の複合動詞における V1 はそれ独自の最大投射を有していることを示す。最後に、第 4 節で結論を述べる。

2. 二種類の日本語複合動詞

日本語複合動詞は、2 つの述語が形態的には一語として見なされる複雑述語構文の 1 つである。影山 (2014) によると、日本語複合動詞の形態上の定義は「接続する 2 つの動詞が間に接続形式なしに直接結びつく場合である」。換言すると、(1a) は日本語複合動詞であるが、(1b) は日本語複合動詞には該当しない。

- (1) a. 飛び上がる、歩き回る、食べ続ける、歩き始める
 b. 食べテみる、歩いテ回る

(1a) では、V1 の連用形と V2 が結びついていることが示されている。一方、(1b) の場合は、V1 の連用形と V2 との間に接続形式の 1 つである「テ」が介在している。したがって、(1b) は影山 (2014) が示す日本語複合動詞の定義とは合致しない。本稿では、(1a) に該当するものを研究対象とする。

さらに、(1a) に示した日本語複合動詞には、(2a) に示すように、語彙的緊密性 (lexical integrity) の原理 (Anderson 1992: 84) が関与していることが知られている。語彙的緊密性とは、複合語の一部に統語操作を適用させることができないことを指す。

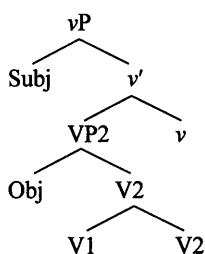
- (2) a. *飛びモ上がる、*歩きモ回る、*食べモ続ける、*歩きモ始める
 b. 食べテモみる、歩いテモ回る

(2a) では、V1 と V2 の間にとりたて詞の「モ」が介在すると、容認度が低くなることが示されている。一方、(2b) に示すように、V1 と V2 の間に接続形式「テ」が介在している場合、とりたて詞「モ」が介在したとしても、(2b) の例は容認される。この差異は、(2a) に示した日本語複合動詞は形態的には 2 つの語が接続しているが、統語部門では 1 語となるのに対して、(2b) に示した複雑述語は統語部門では 2 語となることを示している。

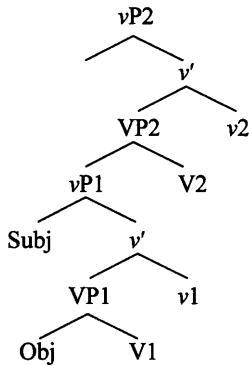
2. 1. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違い

(1a) に示した日本語複合動詞は、影山 (1993) 以来、語彙的複合動詞と統語的複合動詞に大別される。語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いは、語彙的複合動詞の場合、V2 が最大投射を持ち、V1 は V2 の表す事象を補う付加詞としての役割を果たしている (Tomioka 2004)。一方、統語的複合動詞は V2 が V1 を主要部とする動詞句 (vP1) を取ると考えられている。このことを表した樹形図が、(3) である。

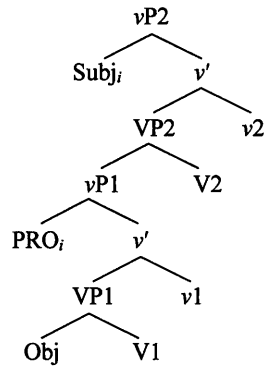
- (3) a. 語彙的複合動詞



b. 統語的複合動詞 (繰り上げ構文)



c. 統語的複合動詞 (コントロール構文)



語彙的複合動詞は、形態的には2語であるが統語的には1語として振る舞う。また、V1とV2の組み合わせには偶然の空白も多いという特徴を有する。一方、統語的複合動詞は、(3b)と(3c)に示したようにV2がV1を主要部とする動詞句(vP1)を取る。また、統語的複合動詞には偶然の空白はなく、V1とV2間で意味に齟齬がない限り、あらゆる組み合わせが可能である。例えば、「始まり終わる」はV1とV2間で意味に齟齬があるため、容認されない。統語的複合動詞はV2の特性により(4)に示すように、繰り上げ構文とコントロール構文と繰り上げ構文なのかコントロール構文なのか曖昧なものの3種類に大別される。

(4) a. 繰り上げ構文：-かける、-出す、-まくる、-過ぎる

b. コントロール構文：-直す、-損ねる、-尽くす、-つける

c. 曖昧なもの：-始める、-続ける

(Kishimoto to appear)

繰り上げ構文の場合、(3b)に示すように、V2はそれ自体が外項に項を要求することはない。一方、コントロール構文では、(3c)に示すように、主語はvP2の指定部のSubjに具現化され、vP1の指定部にはPROが具現化される。そして、vP2の指定部のSubjとPROには同一指標が振られる。

統語的複合動詞においてV2が繰り上げ構文に分類されるものなのか、コントロール構文に分類されるものなのかを識別する方法がある。先に概説した繰り上げ構文とコントロール構文の違いに着目した診断方法として、Kishimoto (to appear) は、(5)に示すイディオムによるテストと(6)の無生物主語によるテストを行っている。これらのテストに合格するのであれば、そのV2は繰り上げ構文と見なされる。イディオムはもともと「閑古鳥が鳴く」のように1つのまとまりを作っていないわけではない。そのため、繰り上げ構文であれば、「閑古鳥が鳴く」という句に起動相を表す「-出す」が併合するためイディオムの解釈が出るが、コントロール構文であれば、もともと「閑古鳥」と「鳴く」が1つのまとまりを成

していないため、それに V2 が併合しても、イディオムの解釈は出ず、文字通りの解釈しか出ない。一方、無生物主語によるテストは、コントロール構文では有生物の主語を必要とするのに対して、繰り上げ構文では主語が有生物でも無生物でも良いことを利用している。

- (5) a. この店で閑古鳥が鳴き {-出し/-かけ} た。 (OK イディオム/OK 文字通り)
 b. この店で閑古鳥が鳴き {-終わっ/-直し} た。 (NG イディオム/OK 文字通り)

- (6) a. 雨が降り出した。
 b. *雨が降り {-損ね/-忘れ/-残し} た。

(5) と (6) では、イディオムによるテストと無生物主語によるテストの事例が示されている。例えば、「-出す」は両方のテストに合格しているため、繰り上げ構文であると見なされる。

次に、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の識別方法について概説する。影山 (1993) によると、複合動詞が語彙的なのか統語的なのかは、複合動詞を構成している V1 が最大投射を有しているかどうかを検証することにより分類される。例えば、V1 の動詞的名詞 (verbal noun) への代用や V1 の受動化、それに加えて、複合動詞を形成する際、3 つ以上の動詞を連続させられるかどうかという基準がある。¹

まず初めに、V1 の動詞的名詞への代用を見てみよう。V1 の動詞的名詞への代用の可否を調べることにより、なぜ V1 が最大投射を持つかどうかを検証できるのかという点、「動詞的名詞+する」を派生させるためには、理論上、vP まで投射していなくてはならないからである (Kishimoto 2001: 625–626)。例えば、「(木) を伐採する」は、もともとは「(木) の伐採をする」という形で具現化されるが、動詞的名詞 (i.e., 伐採) と「する」が vP に編入されることによって「伐採する」が派生される。したがって、V1 が「動詞的名詞+する」の複合動詞は、帰結として、統語的複合動詞となるのである。具体例として (7) を見てみよう。

(7) 動詞的名詞への代用

- a. 太郎が木を切り倒した。 a' *太郎が木を伐採し倒した。 (語彙的複合動詞)
 b. 太郎が木を切り始めた。 b' 太郎が木を伐採し始めた。 (統語的複合動詞)

(7a) では、「切り倒す」における V1 「切り-」を動詞的名詞「伐採し-」に置き換えると容認されないことが示されている。² 一方、(7b) では、「切り始める」における V1 「切り-」を「伐採し-」に置き換えても容認度が変わらないことが示されている。この基準より、「切り倒す」は語彙的複合動詞であるのに対して、「切り始める」は統語的複合動詞であると見なされる。

次に、V1 の受動化による統語テストを概説する。受動態 (passive voice) の統語論に關す

る先行研究では、受動態を表す形態素 *-rare-* が統語構造上、どの主要部を占めているのかという問いが議論されている (Fukuda 2012, Aoyagi 2015 等)。本稿では、この問題に深く踏み込まない。ここで重要なのは、*-rare-* が何らかの機能範疇 (e.g., vP ないし VoiceP) の主要部を占めると仮定した場合、統語構造上、VP よりも高い位置、かつ、V2 よりも低い位置に *-rare-* が占める機能範疇を仮定する必要があることである。別の言い方をすると、複合動詞を構成している V1 に形態素 *-rare-* を付加できるのであれば、V1 を主要部とする最大投射 VP1 よりも高い位置に機能範疇が存在することになる。この考察が正しいと仮定すると、V1 の受動化による統語テストに合格するのは、V1 が最大投射 (VP1) を持つ統語的複合動詞のみであると予測される。実際、この仮定は、(8) に示すように、裏付けられる。

(8) V1 の受動化 (影山 1993: 87)

- a. *書かれ込む (cf. 書き込む)、*押され開ける (cf. 押し開ける) (語彙的複合動詞)
- b. 名前が呼ばれ続けた、愛され続けた、殺されかけた (統語的複合動詞)

(8a) では、「書き込む」や「押し開ける」という複合動詞における V1 を受動化させた「書かれ込む」や「押され開ける」が容認されないことが示されている。それに対して、(8b) では、「呼び続ける」「愛し続ける」「殺しかける」における V1 を受動化させたものが容認されることが示されている。このことより、(8a) に示した複合動詞は語彙的複合動詞であるのに対して、(8b) に示した複合動詞は統語的複合動詞であることがわかる。

最後に、複合動詞を形成する際、3 つ以上の動詞を連続させられるかどうかという基準について概説する。影山 (1993) によると、語彙部門で作られる語彙的複合動詞は 2 つの動詞の組み合わせに限られる。それに対して、統語的複合動詞の場合は、補部に動詞句を選択できるため、意味に齟齬がない限り 3 つ以上の動詞を組み合わせることができると予測される。

(9) 3 つ以上の動詞連続の可否

- a. 積み上げる + 積み重ねる → *積み上げ重ねる
*積み重ね上げる (語彙的複合動詞)
 - b. コングがラグビーのルールを説明し始めかけた時、
彼ら A チームに 1 人の男が近づいてきた。 (統語的複合動詞)
 - c. 客が船に乗り込み始めた。 (語彙的複合動詞と統語的複合動詞の組み合わせ)
- ((9a) と (9c) は影山 (1993: 93) より、(9b) は「北欧に進路を取れ！」より引用)

(9a) では、「積み上げる」と「積み重ねる」という複合動詞が表す「積む」「上げる」「重ねる」を 3 つ組み合わせると、容認されないことが示されている。この経験的事実は、(4) に示した統語的複合動詞を作る動詞以外の動詞で複合動詞を作る際、2 つの動詞の組み合わせ

に限られることを示唆している。一方、(9b) では、「説明する」と「始める」と「かける」という 3 つの動詞が連続して「説明し始めかける」という複合動詞が作られている。この複合動詞は、(7) に示したように、「説明する」という「動詞的名詞＋する」は統語部門で作られる。さらに、「-始める」と「-かける」は (4) に示したように、統語的複合動詞を構成する後項動詞である。したがって、「説明し始めかける」という複合動詞はすべて統語部門で作られていることになり、統語的複合動詞であることがわかる。また、(9c) に示された「乗り込み始める」という複合動詞は語彙的複合動詞と統語的複合動詞が組み合わせられたものである。「乗り込み始める」は、「乗り込む」が語彙部門で作られ、その後、統語部門で「-始める」が「乗り込む」を構成する vP を補部を取る。つまり、「乗り込み始める」は語彙的複合動詞と統語的複合動詞が組み合わせられた複合動詞であることがわかる。

以上、日本語複合動詞は語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二種類に大別されることを概観した。語彙的複合動詞は V2 が最大投射を持ち、V1 は V2 の表す事象を補う役割を果たしているのに対して、統語的複合動詞は V2 が V1 を主要部とする動詞句 (vP1) を取ることを示した。さらに、その考察を裏付けるために、V1 を動詞的名詞に置き換えるテスト、V1 を受動化させるテスト、3 つ以上の動詞を連続させられるかどうかのテストを紹介し、統語的複合動詞はすべてのテストに合格するが、語彙的複合動詞はすべてのテストに合格しないことを示した。

2.2. 語彙的複合動詞の組み合わせに関する制限

影山 (1993) は、語の語形成部門 (i.e., 形態部門) は語彙部門のみや統語部門のみではなく、語彙部門と統語部門の両方に認めるべきだとするモジュール形態論の立場に立ち、日本語の語彙的複合動詞は語彙部門で作られるのに対して、統語的複合動詞は統語部門で作られると提案している。さらに、語彙的複合動詞はあらゆる動詞を組み合わせられるわけではなく、語彙的複合動詞の組み合わせには制限があることを指摘している。具体的には、(10) に示す他動性調和の原則 (Transitivity Harmony Principle) を提案している。

(10) 他動性調和の原則 (影山 1993, 斎藤 2013 より引用)

語彙的複合動詞の V1+V2 において、V1 と V2 は外項の有無に齟齬があってはならない。

(10) は、語彙的複合動詞の組み合わせには、外項を持つ動詞、すなわち、他動詞と非能格動詞の組み合わせ (i.e., 他動詞+他動詞、他動詞+非能格動詞、非能格動詞+他動詞、非対格動詞+非対格動詞) ないし外項を持たない動詞、すなわち、非対格動詞+非対格動詞の組み合わせしかないことを示している。³

表 1 語彙的複合動詞の組み合わせ

		V ₂		
		他動詞	非能格動詞	非対格動詞
V ₁	他動詞	OK 持ち上げる	OK 探し回る	NG 切り倒れる
	非能格動詞	OK 乗り換える	OK 飛び上がる	NG 乗り換わる
	非対格動詞	NG 生まれ変える	NG 崩れ降りる	OK 焦げ付く

表 1 における太枠の部分が他動性調和の原則の適用範囲を示している。Masica (1976) が指摘するように、複合動詞は中国語や韓国語などのようにアジア圏の言語に観察される。しかしながら、他動性調和の原則が規則的に適用されるのは、日本語複合動詞のみであり、これは日本語の特徴の 1 つだと考えられている (影山 1993, Saito 2012)。⁴

ただし、影山 (1993) には反例があることが由本 (1996) と松本 (1998) によって指摘されている。⁵ 具体的には、松本 (1998: 72) は語彙的複合動詞の語形成は意味構造の合成であると提案している。また、(11) に示す反例を根拠として (12) に示す主語一致の原則を提案している。

(11) 影山 (1993) と Saito (2012) と 斎藤 (2013) に対する反例 (松本 1998: 49)

a. 非能格動詞 + 非対格動詞

歩き疲れる、遊び疲れる、泳ぎ疲れる、立ち疲れる、座り疲れる、
しゃべり疲れる、鳴きくたびれる、走りくたびれる、泣きぬれる、泣き沈む

b. 他動詞 + 非対格動詞

読み疲れる、待ちくたびれる、飲みつぶれる、食いつぶれる、
聞きほれる、見ほれる

(12) 主語一致の原則 (松本 1998: 72) (cf. 由本 1996: 114)

二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者 (通例、主語として実現する意味的項) 同士が同一物を指さなければならない。

(11) は、松本 (1998) が提示した他動性調和の原則に対する反例である。(11a) と (11b) では、両方とも V₂ が非対格動詞であるにもかかわらず、V₁ が非能格動詞ないし他動詞である点で、他動性調和の原則では捉えられないデータである。もし Saito (2012) が考察するように、他動性調和の原則が日本語の複合動詞に特有の一般化なのであれば、(11) に示した例における V₂ が取る V₁ は非対格動詞でなくてはならないはずである。しかし、実際には、例えば、V₂ 「-疲れる」が V₁ に取るのは、非対格動詞ではなく、他動詞ないし非能格動詞が可能である。

なお、(11) において示されている V₂ は「-疲れる」「-くたびれる」「-ぬれる」「-沈む」「-つぶれる」「-ほれる」である。このうち、「-ぬれる」と「-沈む」「-つぶれる」は本稿

の議論の対象から外す。「泣きぬれる」と「泣き沈む」「飲みつぶれる」「食いつぶれる」を構成している V2 は、本動詞ではないからである。「泣き濡れる」は V1 と V2 の合成的な意味ではなく、「泣き濡れる」という動詞であると考えられる。「泣き濡れる」が取る項は「顔」であり、人 (e.g., 太郎) が項として具現化しない点で、V1 と V2 が単純動詞として使われる際の項が具現化しない。さらに、「泣き濡れる」は「顔が泣き濡れた」はあまり容認されず、「泣き濡れた顔」のように関係節化した例でしか使えない。次に、「-沈む」は「気持ちが落ち込む」ことを、また、「-つぶれる」は「動けなくなる」ことを表す語彙的アスペクトであると考えられる。語彙的アスペクトについては影山 (2013) を参照されたい。

また、(11) に示されている V2 が非対格動詞なのかどうかは「かけ構文」を用いて検証することができる。例えば、「疲れる」が単純動詞として使われる場合、「疲れる」は (13) に示すように「かけ構文」に適用可能であるため、非対格動詞であると見なされる。

- (13) a. 疲れかけの身体 (cf. 身体が疲れた。)
b. 疲れかけの子ども (cf. 子どもが疲れた。)

また、「疲れる」は内項に対象の意味役割を持つ項を取るか補文を取る。

- (14) a. 樵は木を切ることに疲れた。
b. [_{VP} [_V [_{VP} 樵 [_{DP} 木を切ることに] [_V 疲れ]]] _v]

さらに、杉村 (2007) は、V2 が「-疲れる」の複合動詞が他の語彙的複合動詞よりも生産性が高いことに注目し、V1 にはどのような特徴があるかを、コーパス (インターネットの WWW ページ) を使用して、調査している。その結果、「-疲れる」と共起しやすい V1 は、主体自身の状態変化を表す他動詞 (e.g., 読む、食べる) ないし主体自身に影響を及ぼす非能格動詞 (e.g., 歩く、遊ぶ) であった。⁶ 一方、「-疲れる」と共起しにくい V1 は、対象への影響を表す他動詞 (e.g., 壊す、燃やす) ないし移動行為そのものを表す非能格動詞 (e.g., 行く、来る) ないし主体がある場所に定着して存在することを表す非能格動詞 (e.g., 泊まる、暮らす) ないし非対格動詞に分類されるものであった。このことから、杉村氏は V2 が「-疲れる」の複合動詞における V1 の特徴は動詞の自他は関係なく、V1 が主体の能動的行為 (感情) を表すものであるかどうかであると考察している。

しかしながら、由本 (1996) と松本 (1998) と杉村 (2007) の議論には問題点がある。それは V2 が「-疲れる」の複合動詞が統語的複合動詞ではないとは議論せず、語彙的複合動詞であるものと見なして議論している点である。特に、松本 (1998) では、V2 が「-疲れる」の加えて、V2 が「-くたびれる」「-ほれる」の複合動詞も非対格動詞として他動性調和の原則の反例として提示されている。しかし、これらが統語的複合動詞ではないとは議論していない。ここで、作業仮説を示す。

(15) 作業仮説

V2 が「-疲れる」「-くたびれる」「-ほれる」の複合動詞は統語的複合動詞である。

もし (15) に示した作業仮説が正しいのであれば、複合動詞を構成している V1 にのみ、(7) と (8) と (9) に示した統語テストを適用できるはずである。一方、「V+ 疲れる」「V+ くたびれる」「V+ ほれる」が語彙的複合動詞なのであれば、これらのテストが適用されないはずである。次節では、V2 が「-疲れる」「-くたびれる」「-ほれる」の複合動詞に統語テストが適用されるかどうかを診断する。

3. 考察

本節では、「V+ 疲れる」「V+ くたびれる」「V+ ほれる」における V1 に統語テストを適用できるかどうか検証する。これらの複合動詞を検討することにより、(11) に示した松本 (1998) により提示されている事例が他動性調和の原則の反例なのかどうかを調べることができる。もし、作業仮説が正しくないのであれば、他動性調和の原則だけではうまく説明できない組み合わせの語彙的複合動詞があるという帰結を導出することになるからである。本節では、「V+ 疲れる」は統語的複合動詞であるのに対して、「V+ ほれる」は語彙的複合動詞であると提案する。また、「V+ くたびれる」に関しては、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方の特性を有していることを示す。なお、本稿では、筆者による内省によるデータと検索エンジン Google から抽出したデータを提示する。

3.1. 統語テストによる検証

3.1.1. 動詞的名詞の代用

第一に、(7) で示した動詞的名詞の代用が複合動詞における V1 に適用できるのかどうか検討する。その結果、「V+ 疲れる」に関しては Google 検索でかなりの数がヒットしたのに対して、「V+ くたびれる」と「V+ ほれる」に関しては、まったくヒットしなかった。

- (16) a. 太郎が泣き疲れた。 a'. 太郎が号泣し疲れた。
 a''. 日曜の朝から号泣し疲れてグッタリのおっさんが何人いることやら
 (【魔法使いプリキュア!】第 49 話 感想 まさかの JD、未来の話 より引用)
- b. 太郎が笑い疲れた。 b'. 太郎が爆笑し疲れた。
 b''. 芸術写真をとりすぎて爆笑し疲れた。
 (ついつぶる フォト こんどうさん 2012 年 08 月 25 日 より引用)

- c. 太郎が働き疲れた。 c'. 太郎が労働し疲れた。
c''. 帰宅時刻がとても遅いときのこのような長い在宅自由時間は、今日1日を職業人として労働し疲れた自分をキャンセルして個人としての自分自身に戻る
(斎藤良夫 2012: 21 より引用)

(16) では、「泣き疲れる」「笑い疲れる」「働き疲れる」という複合動詞を構成している V1 「泣き-」「笑い-」「働き-」を動詞的名詞に代用した場合、(16a''), (16b''), (16c'') に示すように、「号泣し疲れる」「爆笑し疲れる」「労働し疲れる」という複合動詞が Google 検索で観察されることが示されている。換言すると、V1 が独自の最大投射 (vP) を有していることが示唆される。このように、V2 が「-疲れる」の複合動詞が V1 に動詞的名詞を取ることができるという経験的データは、「V+ 疲れる」の複合動詞が語彙的複合動詞ではなく、統語的複合動詞であることを強く示唆している。

3.1.2. V1 の受動化

第二に、V1 の受動化テストを複合動詞に適用できるかどうか検討する。検証の結果、「V+ 疲れる」では多く検索されたのに対して、「V+ ぐたびれる」では少し検索されたが非常に限定的であった。一方、「V+ ほれる」では V1 の受動化は検索されなかった。まず、「V+ 疲れる」に当てはめてみよう。

- (17) a. 母親が子どもを叱り疲れた。 a'. 子どもが母親に叱られ疲れた。
a''. 子どもが叱られ疲れていつもより早く寝た。
(『発言小町』<四歳の子供を叱りすぎてしまいます>より引用)
- b. 上司が部下を怒り疲れた。 b'. 部下が上司に怒られ疲れた。
b''. そんなことで怒られ疲れたなんて甘ったれたこと言っているなよ！
(Counseling Service ~カウンセラー発！すぐに役立つ心理学講座~より引用)
- c. 麻酔科医は病院からひたすら麻酔を強いられ疲れて病院を去るという
負のスパイラルに陥っておりました。
(島根大学医学部卒業生の方へ より引用)

(17) は、V2 が「-疲れる」の複合動詞における V1 を受動化させることができることを示している。具体的には、(17a) では、「叱り疲れる」における「叱り-」を受動化させて「叱られ- (sika^r-are-)」にすることができていることが示されている。同様に、(17b) では、「怒り疲れる」における「怒り-」を、(17c) では、「強いり疲れる」における「強いり-」をそれぞれ

「怒られ- (okor-are-)」と「強いられ- (siir-are-)」にすることができることが示されている。
次に、「V + くたびれる」を見てみよう。

- (18) a. *太陽が太郎に日光を晒しくたびれた。 a' 太郎が日光に晒されくたびれた。
a'' 久しぶりに直射日光に晒されくたびれてランディング上の東家で
寝込んでしまった。 (今月のフライト日誌 より引用)
b. 太郎は花子を待ちくたびれた。 b' 花子は太郎に待たされくたびれた。
b'' しかし、待たされくたびれてワシは途中居眠りしてもうたよ
(Ameba ブログ より引用)

(18a) と (18a') は、能動態では容認されないが、受動態では容認される例である。ただし、(18a) において、「-くたびれる」を省いた「(太陽が)太郎に日光を晒した」や「太郎が日光にさらされた」であれば容認される。これらのデータは、(18a') と (18a'') に示された「晒されくたびれた」は、統語部門において「晒された (saras-are-ta)」が作られ、それに「-くたびれた」が併合していると考えられる。同様に、(18b) では、「V + くたびれる」における V1 に受動態を表す接辞 *-(r)are-* を付けたとしても容認されることが示されている。このように、「V + 疲れる」と「V + くたびれる」における V1 に *-(r)are-* を付けたとしても容認されるという事実は、V1 が独自の最大投射を持つことを示している。

3.1.3. 3つ以上の動詞連続の可否

最後に、3つ以上の動詞連続を許すかどうかを見る。もし3つ以上の動詞連続を許すのであれば、その複合動詞は統語的複合動詞ないし語彙的複合動詞と統語的複合動詞の組み合わせられたもの、すなわち、前項動詞と後項動詞の間に階層があるものであると見なされる。一方、3つ以上の動詞連続が許されないのであれば、語彙的複合動詞であると見なされる。検証した結果、「V + くたびれる」と「V + ほれる」の場合、3つ以上の動詞が連続している例は検索されなかった。一方、「V + 疲れる」に関しては、(19b) に示す例が Google から検索された。

(19) 3つ以上の動詞連続の可否

- a. 太郎は板書をノートに汚い字でぐちゃぐちゃに書き写し疲れた。
a'. *太郎は板書をノートに汚い字で [vp ぐちゃぐちゃに [v 書き写し疲れ]] た。

b. 私はこのロコミを食ベログに何度も記入し直した。
b'. *私はこのロコミを食ベログに[vp 何度も記入し直し疲れ]ました。
(食ベログ アフタヌーンティーティールーム ロコミ より引用)

まず、(19a) は筆者の作例である。「書き写し疲れる」という複合動詞に様態を叙述する付加詞「ぐちゃぐちゃに」が付加されていることを示している。また、(19a') に示すように、「ぐちゃぐちゃに」という付加詞は「書き写し疲れ」を作用域に取っていないことを示している。これは「ぐちゃぐちゃに」の作用域が「-疲れ」よりも狭いことを示唆している。別の言い方をすると、少なくとも、「-疲れ」は「(書き)写し」よりも階層構造上、高い位置に生成されていることになる。つまり、「書き写す」と「-疲れる」の間に階層がある点で語彙的複合動詞と統語的複合動詞を組み合わせたものであると見なされる。

次に、(19b) は、「記入し直す」という統語的複合動詞に「-疲れる」が併合した例である。(19b') は、実際に Google 検索で見つかった例である。(19b') の場合は、「記入し直し疲れ-」の部分で「何度も」が c-統御しているため、容認されないことが示されている。また、(19b') より、「-疲れる」は、統語部門で作られる動詞的名詞「記入+する」と統語的複合動詞を構成する V2「-直す」よりも階層構造上、高い位置に生成されているものであることがわかる。(19a) と (19b) での考察は、後項動詞が「-疲れる」の複合動詞は語彙的複合動詞と統語的複合動詞を組み合わせたものないし統語的複合動詞であることが明らかになった。つまり、「-疲れる」と前項動詞との間には階層があることを示唆している。

以上、「V + 疲れる」「V + くたびれる」「V + ほれる」における V1 に統語テスト (動詞的名詞の代用・V1 の受動化・3 つ以上の動詞連続の可否) が適用されるかどうか検討した。その結果、表 2 に示すように、「V + 疲れる」の複合動詞のみが、すべての統語テストに合格した。

表 2 統語テストの結果

	動詞的名詞の代用	V1 の受動化	3 つ以上の動詞連続
V + 疲れる	✓	✓	✓
V + くたびれる		✓	
V + ほれる			

この経験的事実は、V2 が「-疲れる」の複合動詞は語彙的複合動詞ではなく統語的複合動詞であることを強く示唆している。一方、V2 が「-ほれる」の複合動詞は統語テストにまったく合格しなかった。この帰結は、V2 が「-ほれる」の複合動詞が語彙的複合動詞であること、また、「ほれる」は非対格動詞であるため、V2 が「-ほれる」の複合動詞は、他動性調和の原則ではうまく説明できず、他の仮説を仮定しない限り説明できないことを示唆している。さらに、V2 が「-くたびれる」の複合動詞は V1 の受動化を許す事例があったが、動詞的名詞の代用と 3 つ以上の動詞連続のテストには合格しなかった。この帰結は V2 が「-くたびれる」の複合動詞は語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方の特性を有していることになる。なぜ V2 が「-くたびれる」の複合動詞がこのような特性を有しているのかという問い

に関しては今後の研究課題である。

以上の考察から、(15) に示した作業仮説は支持されないが、本稿では、(16) から (19) に示した例を根拠にして、「V + 疲れる」の複合動詞は、語彙的複合動詞ではなく、統語的複合動詞であると提案する。

3.2. 「V + 疲れる」の統語構造

前節では、V2 が「-疲れる」の複合動詞が統語的複合動詞であると提案した。では、「V + 疲れる」の複合動詞は繰り上げ構文に分類されるのであろうか、それとも、コントロール構文に分類されるのであろうか。本節では、(5) と (6) に示したイディオムによるテストと無生物主語を利用したテストを「V + 疲れる」にも応用する。もしこれらのテストに合格するのであれば、「V + 疲れる」は繰り上げ構文に分類されると見なされるからである。

イディオムによるテストと無生物主語によるテストを「V + 疲れる」の複合動詞に当てはめると、(20) に示すように、「V + 疲れる」は両方のテストに合格しない。

- (20) a. *閑古鳥が鳴き疲れた。 (^{NG} イディオム / ^{OK} 文字通り)
b. *雨が降り疲れた。

(20) は、V2 が「-疲れる」の複合動詞は繰り上げ構文に分類されるのではなく、コントロール構文に分類されることを示している。⁷

以上の考察より、本稿では、V2 が「-疲れる」の複合動詞が持つ統語構造は、(21) であると提案する。なお、(21) における「x」は V2 「-疲れる」が取る対象の意味役割を持つ内項であり、一方、PRO は V1 が取る動作主の意味役割を持つ外項である。

(21) 「V+疲れる」の統語構造

[_{VP} [_{v'} [_{VP2} [_{v'2} x_i [_{v'2} [_{VP} PRO_i [_{v'} [_{VP1} v₁] v]] v₂ 疲れ]]]]_v]]

3. 結論

本稿では、松本 (1998) において他動性調和の原則の反例として提示された具体例の中で V2 が「-疲れる」「-くたびれる」「-ほれる」の複合動詞が、統語的複合動詞ではないのかどうか検討した。その結果、V2 が「-疲れる」の複合動詞は、従来、語彙的複合動詞として見なされていたが、統語的複合動詞としての特性を有している点で、語彙的複合動詞ではなく V2 が V1 を主要部とする動詞句 (vP1) を取る統語的複合動詞であることを示した。また、V2 が「-疲れる」の複合動詞は、イディオムのテストと無生物主語によるテストに合格しないため、コントロール構文に分類される統語的複合動詞であることを示した。

本稿での提案は、V2 が「-疲れる」の複合動詞が語彙的複合動詞ではないことになるため、V2 が「-疲れる」の複合動詞は他動性調和の原則の真の反例であるとする松本 (1998) による提案は支持できないことを示唆している。一方、「V+ くたびれる」に関しては統語テストの1つである V1 の受動化を適用することができるデータが観察されたため、語彙的複合動詞なのか統語的複合動詞なのか分類が難しいが、「V+ ほれる」に関しては、どの統語テストにも合格しなかった。それは「V+ ほれる」が統語的複合動詞としての性質を持ちえていない、すなわち、語彙的複合動詞であることを示唆している。そうすると、「-ほれる」は非対格動詞であるため、もし他動性調和の原則のみを仮定するのであれば、「-ほれる」は V1 が非対格動詞のものとし組み合わせることができないことになる。しかし実際には、「ほれる」と組み合わせられる V1 は非対格動詞ではなく、「聞き惚れる」や「見惚れる」のように他動詞である。この経験的事実は、語彙的複合動詞の組み合わせを考察する場合、他動性調和の原則だけではうまく捉えられないことを示唆している。したがって、「V+ ほれる」の複合動詞こそ他動性調和の原則の真の反例と言えよう。今後は、他動性調和の原則だけでなく、「V+ ほれる」を含めた語彙的複合動詞の組み合わせを網羅的に、かつ、過剰生成および過小生成することなく説明することができる仮説を示していく必要がある。その問いに関しては今後の研究課題である。⁸

註

* 本稿を執筆するにあたり岸本秀樹先生から示唆に富むご助言を多数頂いた。ここに記して深謝する。また、本稿は 2017 年 6 月 24 日・25 日に首都大学東京で開催された第 154 回大会日本言語学会において口頭発表したものを加筆修正したものである。日本言語学会での質疑応答の際、質問をしてくださった松本曜先生、日高俊夫先生、三宅知宏先生に謝意を表する。なお、本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費、研究課題「日本語複合動詞の獲得に関する実証的・理論的研究」領域番号 16J02245 の助成を受けたものである。

1. 統語的複合動詞にすべての診断方法が適用されるわけではない。例えば、V1 を代用形「そうする」に置換可能かどうかという診断方法があるが、V2 が「-疲れる」の複合動詞の場合、(i) に示すように、V1 を「そうし-」に置き換えると、容認度が高いとは言えない。

(i) ?太郎は歩き疲れた。そして、次郎もそうし疲れた。

(i) に示した例の容認度があまり高くない原因の1つは、V2 が「-疲れる」の複合動詞が取る V1 の特徴は、主体の能動的行為 (感情) を表すものという杉村 (2007) による考察を援用すると、V1 が「そうする」の場合、「そうする」が主体の能動的行為 (感情) を表しているのかどうか判断できないからであると考えられる。

さらに、V1 を尊敬表現「お～になる」で挟むことができるかどうかという診断方法もある。この診断方法もまた、(ii) に示すように、V2 が「-疲れる」の複合動詞に適用させると座りが悪い。

(ii) ?山田先生がお歩きになり疲れた。

(iii) [_{VP} [_{v'} [_{VP2} [_{V2} 山田先生 _i [_{VP} PRO_i [_{v'} [_{VP1} V1 歩き _v]] V2 疲れ]]]]_v]]

(ii) が容認されにくい理由は、PRO が指し示すものが尊敬されうる人なのかどうか不明であるからであると考えられる。Kishimoto (2007) による主語尊敬表現が表す統語構造を仮定すると、主語尊敬表現は _{VP} における指定部と主要部の一致 (Spec-head agreement) によって説明されるが、(iii) では、_v が一致しているのは「山田先生」ではなく PRO であり、直接的に「山田先生」に主語尊敬表現を適用させているのではない。具体的には、まず、PRO に尊敬表現を適用させる。次に、その PRO が尊敬する人であるかどうかを確かめるために、同一指標を持つ項を探す。それから、同一指標を持つ「山田先生」が見つかる。最後に、「山田先生」は尊敬する人であるため派生は破綻しない。このようなプロセスを経て「山田先生」に主語尊敬表現が適用されるため、このプロセスの長さが容認度の高低に影響していると考えられる。

2. 「切り倒す」における「-倒す」は何度も V1 と同じことをするという意味もある。したがって、(7a') を「太郎が複数の木を次々と伐採した」という解釈であれば容認される。

3. 本稿では非対格仮説 (Unaccusative hypothesis) (cf. Perlmutter 1978) を採用している。非対格仮説とは、項を 1 つのみ取る自動詞を 2 つに分ける仮説である。具体的には、その項が外項であれば非能格動詞 (Unergative verb) であるのに対して、内項であれば非対格動詞 (Unaccusative verb) である。なお、本稿では、非能格動詞なのか非対格動詞なのかの診断方法として、「かけ構文」を採用している。詳しくは、Kishimoto (1996) と岸本 (2000) を参照されたい。

4. Aoyagi (2014) は韓国語において観察される連続動詞構文 (Serial verb construction) にも他動性調和の原則が適用できると提案している。

5. 由本 (1996: 113) は、「論文を書き疲れた」という文は非文法的であると見なしている。ただし、由本氏は複合動詞を構成している V1 と V2 の意味関係が「補文関係」を表す場合には解釈できると補足している。この補足は、由本氏も本稿で提案するように V2 が「-疲れる」の複合動詞には統語的複合動詞としての特徴があることを認めているものと捉えることができる。

6. 杉村 (2007) は、時間的幅を持った心理動詞 (i.e., 非対格動詞) (e.g., 悩む, 倦む) もまた、V2 が「-疲れる」の複合動詞の V1 になりやすいと記述している。しかし、杉村氏がどのような基準で非能格動詞と非対格動詞を分類したのかが不明であるため、「悩む」や「倦む」が非対格動詞なのかどうか不明である。実際、「かけ構文」によるテストを行うと、「悩みかけの少年」や「倦みかけの主婦」は容認度があまり高くない。したがって、本稿では議論の対象外とする。

7. Kishimoto (2014) によると、コントロール構文に分類される動詞はそれぞれ補部を取る句の大きさが異なる。したがって、コントロール構文に分類される動詞を組み合わせることも可能で、特に、「直す」と「忘れる」というコントロール動詞の場合、「ケンはその線を定規で引き直し忘れた」(Kishimoto 2014: 8) と連続されることが許される。(19b) でも示したように、「疲れる」は「記入し直し疲れる」というように 3 つの動詞を連続させることができる。「忘れる」と「疲れる」は「直し-」に後続している点で共通している。しかし、「引き直し {忘れ疲れる／疲れ忘れる}」や「記入し直し {忘れ疲れる／疲れ忘れる}」は容認されない。したがって、「疲れる」は「忘れる」と相補分布を成しており、「忘れる」と同じ位置に基底生成していると考えられる。

8. 本稿は、主語一致の原則を支持しない。主語一致の原則を仮定すると、文には主語があるため、かなり

の過剰生成を許すことになり、また、主語一致の原則は語彙的複合動詞の語形成においては何も制約を課していないからである (松本曜先生 (p.c.))。

参考文献

- Anderson, Stephen R. 1992. *A-morphous Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Aoyagi, Hiroshi. 2014. On serialized verbs in Japanese and Korean. *Harvard Studies in Korean Linguistics* XV, 219–231.
- Aoyagi, Hiroshi. 2015. On the notion of subjects and double complement unaccusatives in Japanese. *Case and Agreement in Minimalism: Proceedings of the 17th Seoul International Conference on Generative Grammar* 17, 37–52.
- Fukuda, Shin. 2012. Aspectual verbs as functional heads: Evidence from Japanese aspectual verbs. *Natural Language & Linguistic Theory* 30, 965–1026.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎. 2013. 「語彙的複合動詞の新体系」 影山太郎 (編). 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』 3–46. 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎. 2014. 「日本語複合動詞の言語類型論的意義」 『国語研プロジェクトレビュー』 第5巻, 1号, 8–18.
- Kishimoto, Hideki. 1996 Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis. *Language* 72, 248–286.
- 岸本秀樹. 2000. 「非対格性再考」 丸田忠雄・須賀一好 (編). 『日英語の自他の交替』 71–110. 東京：ひつじ書房.
- Kishimoto, Hideki. 2001. Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32(4), 597–633.
- Kishimoto, Hideki. 2007. Notes on syntactic compound verb constructions in Japanese. *Kobe Papers in Linguistics* 5, 93–109.
- Kishimoto, Hideki. 2014. The layered structure of syntactic V-V compounds in Japanese. *Kobe Papers in Linguistics* 9, 1–22.
- Kishimoto, Hideki. to appear. Syntactic V-V compounds in Japanese. ms. Kobe University.
- Masica, Colin P. 1976. *Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.
- Matsumoto, Yo. 1996. *Complex predicate in Japanese: A syntactic and semantic study of the notion 'word'*. Stanford: CSLI, Tokyo: Kurosio Publishers.
- 松本曜. 1998. 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 第114号, 37–82.
- Perlmutter, David M. 1978. Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Proceedings of the annual meeting of the Berkeley Linguistics Society* 38, 157–189.

- Saito, Mamoru. 2012. On the role of selection in syntactic word formation. Paper presented at the 5th Workshop of NINJAL Collaborative Research Project, December 23, 2012. Nanzan University.
- 斎藤衛. 2013. 「複合動詞の形成と選択制限 他動性調和の原則を手掛かりとして」 岸本秀樹・由本陽子 (編)『複雑述語研究の現在』 207-233. 東京：ひつじ書房.
- 杉村泰. 2007. 「複合動詞「-疲れる」の前項動詞の特徴について」『ことばの科学』第20号, 101-115. 名古屋大学言語文化研究会.
- Tomioka, Naoko. 2004. The lexicalization patterns of verbs and V-V compounds. In Beermann D. and Hellan L. (Eds.), *Proceedings of TROSS 03: Workshop on Multi-Verb-Constructions*. Trondheim. [cited by manuscript version].
- 由本陽子. 1996. 「語形成と語彙概念構造」奥田博之教授退官記念論文集刊行会 (編).『言語と文化の諸相』105-118. 東京：英宝社.

例文の引用元

- Ameba ブログ 寝落ち侍@まこたす 2017年3月12日 『1時間縛り』
<https://ameblo.jp/telecasmako/entry-12255743636.html> (アクセス日：2017年10月2日)
- Counseling Service ~カウンセラー発！すぐに役立つ心理学講座~：
<http://www.counselingservice.jp/lecture/lec639-3.html> (アクセス日：2017年5月2日)
- 伊達梶乃「北欧に進路を取れ！」『The A'-Team』
<http://www.netlaputa.ne.jp/~casino/ateam/2302.html> (アクセス日：2017年10月6日)
- 『発言小町』<四歳の子供を叱りすぎてしまいます>
<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2015/0529/715255.htm> (アクセス日：2017年5月2日)
- 今月のフライト日誌 <http://www.geocities.co.jp/Outdoors/7374/5gatu.htm>
(アクセス日：2017年10月2日)
- 【魔法使いプリキュア！】第49話 感想 まさかのJD、未来の話
<http://anicobin.ldblogger.jp/archives/50501882.html> (アクセス日：2017年5月2日)
- 食ベログ アフタヌーンティーティールーム
<https://tabelog.com/aichi/A2301/A230103/23004671/dtlrvwlst/B89947687/>
(アクセス日：2017年5月2日)
- ついっぶる フォト こんどうさん 2012年08月25日 <http://p.twipple.jp/VeOAg>
(アクセス日：2017年5月2日)
- 斉藤良夫 (2012)「人間の疲れとは何か：その心理学的考察—労働者の長期的疲労の研究方法を構築するための検討—」『労働科学』第88巻, 1号, 13-24.
- 島根大学医学部卒業生の方へ <http://www.shimane-u-med-postgraduate.jp/91.html>
(アクセス日：2017年5月2日)